対人コミュニケーション研究　第 6 号　pp. 29-51　2018 年

他者の所有物による個人空間の侵害：被侵害者における心理・行動的反応と対人恐怖心性との関連

深田博己　　大坂理紗
（広島文教女子大学）

他者の所有する物体による個人空間の侵害が明白な事態における被侵害者の心理・行動的反応として被侵害感情と対処行動の特徴を検討し、また、それらの特徴と対人恐怖心性との関連を検討した。115 人の女子大学生を実験参加者とし、投映法的な質問紙実験を実施した。侵害度が大きくなるほど、被侵害者の被侵害度認知は増加した。被侵害度認知が最も大きかった高侵害条件における被侵害者の被侵害感情は、能動的否定感情と受動的否定感情の 2 因子構造であり、能動的否定感情の方が受動的否定感情よりも強く喚起された。また、高侵害条件における被侵害者の対処行動は、言語的対処行動と回避逃避行動の 2 因子構造であり、回避逃避行動の方が言語的対処行動よりも実行可能性が高かった。被侵害者の対人恐怖心性は、5 因子構造であることが確認された。被害恐怖心性と能動的否定感情および受動的否定感情との間には正の関係、孤立・親密恐怖心性と能動的否定感情および言語的対処行動との間には負の関係が存在した。

キーワード：個人空間、所有物による侵害、被侵害感情、対処行動、対人恐怖心性

問　題

2 つのタイプの個人空間

個人空間（personal space）は、原語をそのままパーソナル・スペースと片仮名表記されることも多く、個体空間（individual space）、私有空間（private space）、身体緩衝体（body-buffer zone）と呼ばれることもある。非言語的コミュニケーションとしての空間行動を代表するのが個人空間である。個人空間は、個人の身体を中心とする空間で、個人とともに移動し、その境界は目に見えない。個人空間として扱われている空間行動には、基本に 2 つのタイプが存在する。

1 つ目のタイプは、対人相互作用を行う場合の二者間の物理的距離、すなわち対人距離（interpersonal distance）である。Hall（1959, 1966）によれば、個人は相手との関係や接触の目的によって 4 つの距離帯（密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離）を使い分けている。このような、他者とのコミュニケーションや相互作用に最適な対人距離の二次元的ないしは三次元的集合体を個人空間と見なすことができる。これはコミュニケーションや相互作用の最適空間としての個人空間

であり、相互作用的個人空間（interactive personal space）と呼ぶことができるだろう。

2 つ目のタイプは、他者との間に一定の距離を保つための対人距離である。Sommer（1959）は、個人空間を個人が他者との間に置く距離であると操作的に定義した。個人は、個人空間を侵害されると、不安感や緊張感を覚え、個人空間を維持するために、回避や逃避といった防衛的な行動をとる。それ以上他者に近づいてほしくない、自分の体を中心とする対人距離の集合体であると言える。この個人空間は、他者の侵入を嫌う防御的個人空間（defensive personal space）と呼ぶことができるだろう。

心理学分野および社会心理学領域の辞典・事典（『APA 心理学大辞典』（VandenBos, 2007　繁桝・四本(監訳), 2013, p. 289）、『改訂新版社会心理学用語辞典』（石井, 1995, pp. 91-92）、『社会心理学事典』（青野, 2009, pp. 264-265）、『社会心理学小辞典〔増補版〕』（穐山, 2002, p. 74））の記述からも、個人空間には 2 つのタイプがあることが裏付けられた。すなわち、辞典・事典の記述内容は、個人空間には、その侵害を不快に思い、逃避や回避などの防衛的行動で対応する防御的空間という側面と、対人コミュニケーションや対人相互作用が行われる適切な距離帯という側面とがあると整理できる。すなわち、個人空間には、防御的個人空間と相互作用的個人空間という 2 つのタイプが存在すると結論付けることができる。これらの 2 つのタイプの個人空間は、対立するものでも矛盾するものでもなく、個人空間の異なる側面を指しているにすぎない。個人空間の研究を進めていくうえで最も重要なことは、研究しようとしている個人空間が相互作用的個人空間なのか、防御的個人空間なのかを明確に区別することである。どのタイプの個人空間を研究対象とするかによって、個人空間の本質的な意味、測定方法、規定因などが大きく異なるからである。

わが国における個人空間に関する研究

個人空間に関する研究の概観　わが国における個人空間に関する研究展望が 3 編の論文によって行われている。三井（1981）は個人空間に関する初期の研究に関して優れた展望を試み、青野（2003a）は従属仮説の立場から対人距離の性差に焦点化した展望を行い、渋谷（1988）は個人空間研究の背景に言及している。

また、わが国における個人空間に関する実証的研究が 22 編の論文として報告されている。22 件の研究のうち、防御的個人空間を扱っている研究は、青野（1981, 2003b）、有賀（2016）、藤原（1986）、福田・坂本（2015）、伏田・長野（2014）、狩野（1993）、熊谷（1992）、野瀬・雨森・中尾・松尾・中岡（2005）の実験 1 と実験 2、渋谷（1985）の実験 1 と実験 2、田中（1973）、八重澤・吉田（1981）、矢澤（2003）の 13 研究 15 実験と多い。これに対して、相互作用的個人空間を扱っている研究は、青野（1979）、北川（1998）、渋谷（1987）、山口・山（2016）の 4 研究と少ない。また、防御的個人空間と相互作用的個人空間の両方を同時に扱っている研究として、青木・城（2010）の 1 研究が見られる。

このほかに、防御的個人空間を扱っているのか相互作用的個人空間を扱っているのかが判然としない研究として、中野・岩本（1993）、渋谷（1985）の実験 3、杉本（2000）がある。なお、熊谷（1987）と大里（2005）の研究は、防御的個人空間と相互作用的個人空間の観点からすると、個人空間の研

究に位置づけることは難しい。

個人空間に関する実証的研究の成果　個人空間の異方性と発達に関しては、個人空間には、前方が広く、後方が狭いという異方構造が存在することが実証され（青野, 1981; 狩野, 1993; 渋谷, 1985 の実験 1; 田中, 1973）、小学生から大学生までの同年齢ペアによる話し合いの役割実験によって、対人距離が同性ペアでは年齢とともに増加するが、異性ペアでは思春期に最大となる山型の変化を示すことが証明された（青野, 1979）。

また、相手との関係性による個人空間の大きさの違いに関しては、個人の性と相手の性の組み合わせとしてみた場合、相手が異性の場合の方が同性の場合よりも個人空間は大きく（青野, 2003b; 福田・坂本, 2015; 渋谷, 1985 の実験 2, 1987）、個人と相手との間の親疎関係からみた場合、知らない相手・親しくない相手に対しての方が知っている相手・親しい相手に対してよりも個人空間は大きく（青野, 2003b; 福田・坂本, 2015; 渋谷, 1985 の実験 2; 山口・山, 2016）、個人と相手との企業内地位の組み合わせとしてみた場合、対人距離は、相手が上司の場合に最も大きく、部下の場合に中間的で、同僚の場合に最も小さいことが示された（青野, 2003b）。

さらに、個人空間の侵害に対する心理的反応と生理的反応に関しては、不安や緊張といった心理的反応は、他者の接近に伴って増加するが、特に、「気づまり」段階あるいは「目をそらしたい」段階で急激に増加し、心拍や皮膚コンダクタンスといった生理的反応は、「気づまり」段階あるいは「目をそらしたい」段階で増加することが解明された（伏田・長野, 2014; 野瀬他, 2005; 八重澤・吉田, 1981）。このほかに、心理的反応を測定した研究として、青木・城（2010）は、二者が着席した状態での 8 段階の距離のそれぞれで、各距離段階での居心地（このままでよいーすぐに離れたい）と会話距離判断（遠すぎるーちょうどよいー近すぎる）を測定している。

物体による個人空間の侵害

個人空間の侵害に関する研究のほとんどは、他者による防御的個人空間の侵害あるいは他者との相互作用的個人空間に焦点化して実施されてきた。これに対して、他者の所有物である物体による個人空間の侵害に着目した研究が 2 件報告されている。

所持品間の距離　拡張的個人空間としての所持品間の距離に着目した有賀（2016）は、サクラとの対人関係に基づいて形成された実験参加者の個人空間が所持品を取り巻く空間に拡張すると仮定した。男女大学生を実験参加者とし、サクラの男子大学生と二人ペアで控室に通し、実験参加者に対するサクラの行動によってサクラに対する実験参加者の好意度を操作した（実験条件：好意度低下、統制条件：普通の好意度）。そして、バッグを机（150cm×70cm）の上において、実験室へ移動するように教示し、先にサクラが横長の机の手前左端にバッグを置いて退室し、次に実験参加者がバッグを置いた。バッグ間の最短距離が測定された。その結果、実験条件の実験参加者の方が統制条件の実験参加者よりも、また、同性（男性）の実験参加者の方が異性（女性）の実験参加者よりも、自分の所持品をサクラの所持品からより離れた位置に置くことが見出された。このように所有者の所持品間の距離へと所有者の個人空間が拡張されることが証明された。

物体による個人空間の侵害　個人空間を他者に侵害された時だけでなく、他者の所有物である物

体に侵害された時でさえ、その侵害を阻止する行動を起こす可能性があると考えた矢澤（2003）は、物体による個人空間の侵害の程度が対処行動と心理反応（嫌悪的情動反応）に及ぼす影響を検討した。面識のない女子大学生の実験参加者と女性の実験協力者（サクラ）が、縦 78cm×横 59cm の机を挟んで対面で着席した。実験は、漢字の想起実験という設定のもとに進められ、実験協力者は 2 人分のコーヒーを用意し、コーヒーカップを机上の両者それぞれの側の端 0cm に置いた。3 分間の作業を実験参加者に行わせている間に、実験協力者は、コーヒーを飲み干し、作業の修了と休憩を告げ、記入済みの用紙を回収し、自分の空のコーヒーカップを実験参加者の方に置いて、実験室を退出した。カップを置く机の位置は実験参加者側から 0cm（近距離条件）、13cm（中距離条件）、26cm（遠距離条件）であった。実験協力者がカップを実験参加者側に置いた時点から 4 分（240 秒）経過するまで、実験者は、マジックミラー越しに、実験参加者が実験協力者の置いたカップを移動する反応を観察した。4 分経過後に、実験協力者は再び入室し、カップが置かれた時の心理状態を 5 項目（圧迫感、不快感、気づまり、カップを気にした、カップをずらそうと思った）で実験参加者に評定させた。その結果、カップをずらすという対処行動をとった実験参加者の割合は、距離が近い（侵害度が大きい）ほど増加していた（近距離：61.9％、中距離：42.9％、遠距離：4.8％）。対処行動が生起するまでの時間（対数反応潜時：対処行動が起こらなかった場合は 240 秒の対数値を割り当てた）も、距離が近い（侵害度が大きい）ほど小さかった。しかし、距離（侵害度）は 5 つの心理反応に全く影響していなかった。

先行研究の問題点と本研究の課題

矢澤（2003）の研究の問題点とその改善方向　物体による個人空間の侵害を扱った唯一の先行研究である矢澤（2003）の研究には大きな問題点が存在する。1 つ目は、対面で着席している他者と被侵害者の間に縦の長さ 58cm の机が置かれ、他者が飲み干したコーヒーカップを被侵害者から 0cm、13cm、26cm の距離の机上に置くという侵害条件の設定の不自然さである。机上の中間点が被侵害者側から 29cm の位置にあるので、中距離条件の 13cm の位置は日常生活では経験しにくい範囲の侵害条件である。まして、近距離条件の 0cm は不自然すぎて、現実感の欠落した条件設定であると批判できる。現実的に起こりうる範囲での個人空間の侵害状況を設定すべきであろう。したがって、本研究では、現実感の伴う個人空間の侵害状況を設定する。

2 つ目は、着席した対面の座席に被侵害者が座り続けることを要求される実験状況の設定、および、実験協力者と実験参加者という暗黙の地位関係が存在する実験状況の設定が原因となり、個人空間の侵害に対する対処行動が、コーヒーカップを移動させるという行動に限定されてしまっていることである。個人空間の本質的性質として、侵害に対しては防衛的・回避的・受動的行動がとられるはずである。個人空間を侵害してきた物体を移動させる対処行動は、むしろ攻撃的・積極的・能動的行動としての特徴をもつ。したがって、たとえば被侵害者が移動可能な実験状況の設定であれば、その席から立ち去るなどの対処行動もありうるし、横並びの席であれば、椅子をずらすという対処行動も可能であろう。また、侵害者と被侵害者の社会的地位が同等であれば、物体による侵害に対して抗議するなどの言語的対処行動がとられる可能性も大きい。したがって、本研究では、

移動可能な状況で、横並びの席に社会的地位が同じ侵害者と被侵害者が着席する設定にすることにより、複数の対処行動の実行が可能となるようにする。

個人空間の侵害に対する被侵害者の反応　上で触れたように、防御的個人空間を扱った研究は 13 研究 15 実験存在するが、これらのうちで有賀（2016）と熊谷（1992）を除く他の全てが対人距離を測定している。しかし、他者の所有物による個人空間の侵害を扱う場合には、対人距離が一定に保たれた状態での、所有物による侵害なので、対人距離は従属変数になりえない。

他者が関わる防御的個人空間の侵害に対する反応を測定した先行研究には、心理的反応と生理的反応の両方を測定した研究が多い。防御的個人空間を扱った①藤原（1986）は、心理的反応として不安と緊張の 2 項目に加え、20 項目の接近者の印象、生理的反応として心拍数の 1 指標、②伏田・長野（2014）は、心理的反応として不安、緊張、接近者の見えの大きさの 3 項目、生理的反応として心拍数、皮膚コンダクタンス、指尖血流量の 3 指標、③野瀬他（2005）は実験 1 と実験 2 で心理的反応として不安、緊張、接近者の見えの大きさの 3 項目、生理的反応として心拍数、瞬目数、呼吸数の 3 指標、④八重澤・吉田（1981）は、心理的反応として不安、緊張、接近者の見えの大きさの 3 項目、生理的反応として心拍数、瞬目数の 2 指標を測定している。また、物体による防御的個人空間の侵害を扱った矢澤（2003）では、上述した 5 項目の心理的反応を測定している。

また、個人空間の侵害に対する行動的反応を測定した先行研究も 2 件見られ、熊谷（1992）は、退避行動潜時を、上述した矢澤（2003）は 1 種類の対処行動の生起率と生起潜時を測定している。

本研究では、被侵害者の心理的反応と行動的反応に注目し、心理的反応としては、被侵害度認知は 1 項目で測定するが、被侵害感情は幅広い否定的感情項目を用意して測定する。また、行動的反応に関しても、積極的－消極的な対処行動、言語的－行動的対処行動という 2 つの視点から幅広い対処行動項目を用意して測定する。

物体による個人空間の侵害に対する反応を規定する被侵害者のパーソナリティ特性要因　他者による個人空間の侵害に比べると、他者の所有する物体による個人空間の侵害は、被侵害者にもたらす被侵害度の影響が小さい可能性がある。しかし、物体による個人空間の侵害の場合でも、ある特定のパーソナリティ特性をもつ被侵害者には、比較的大きな影響が生じると期待される。防御的個人空間の侵害を扱った先行研究では、被侵害者のパーソナリティ特性として支配性（青野, 1981）、シャイネス（福田・坂本, 2015）、向性（田中, 1975）が使用されている。これらのパーソナリティ特性に関しては、尺度得点（総得点）に基づいて、被侵害者を高群と低群に分類する形で処理されている。そして、向性に関しては、内向群の方が外向群よりも個人空間が大きいことが見出されたが、個人空間に対する支配性とシャイネスの影響は部分的に見出されたにすぎなかった。また、防御的個人空間と相互作用的個人空間のいずれを扱っているのか不明瞭な先行研究の中に、被侵害者のパーソナリティ特性として対人恐怖心性を使用した研究（杉本, 2000）がある。この研究では、堀井・小川（1996, 1997）の対人恐怖心性尺度を使用し、4 つの下位尺度得点（因子別得点）に基づいて、被侵害者を因子ごとに高群と低群に分類し、4 種類の因子別に対人恐怖心性が対人距離等に及ぼす効果を検討した結果、因子ごとの影響の特徴を見出しているが、尺度得点（総得点）は分析に利用していない。

パーソナリティ特性を取り上げた 4 つの先行研究はいずれも、尺度得点あるいは下位尺度得点の高低から被侵害者を高群と低群に二分して、分析に利用している。すなわち、本来、情報量を多く含む間隔尺度の得点を、情報量の少ない名義尺度のカテゴリーに落として分析に使用している。本研究では、尺度得点をそのまま間隔尺度の水準で分析に使用したい。

防御的個人空間の大きさと関わりのあるパーソナリティとしては、他者との接触に恐怖を感じる傾向を意味する対人恐怖心性が最も有力視される。対人恐怖心性を取り上げた先行研究（杉本, 2000）では、改良前の古い尺度を使用しているので、本研究では、改良された 5 因子 25 項目から構成される「対人恐怖心性尺度Ⅱ」（堀井, 2006）を使用する。

また、先行研究（杉本, 2000）では、下位尺度得点（因子別得点）しか分析に使用されていないが、本研究では尺度得点（総得点）と下位尺度得点（因子別得点）の両方を分析に使用する。

本研究の目的

本研究では、他者の所有物によって明らかな個人空間の侵害が発生したとき、その際に被侵害者が感じる多様な被侵害感情と、被侵害者がとりうる多様な対処行動とを明らかにする。また、こうした被侵害感情や対処行動に及ぼす被侵害者の対人恐怖心性の影響を探索的に検討する。

方　法

実験計画と実験参加者

実験計画　「物体によるパーソナル・スペースの侵害に関する調査」という題目の質問紙を作成し、質問紙実験を実施した。「物体による個人空間」の侵害に関して、場面想定法を用いて、侵害度の異なる 3 種類の侵害条件を設定し、各条件における被侵害度認知を測定した。この部分のみを見ると、3 種類の侵害度から成る侵害要因（低侵害条件、中侵害条件、高侵害条件）を独立変数とする 1 要因 3 水準の参加者内要因計画の質問紙実験である。しかし、上記の 3 種類の侵害条件における侵害度認知の測定部分を除けば、他の全ての測定項目は、設定された高侵害条件における被侵害者の対処行動と被侵害感情を測定するものであり、さらには、実験参加者の個人特性としての対人恐怖心性を測定するものであった。

実験参加者　女子大学生 118 人を実験参加者としたが、回答に不備の見られた 3 人を削除し、残った 115 人を有効参加者とした。有効参加者の平均年齢は 20.10 歳（*SD* =1.02）であった。

調査手続き

質問紙の構成　「物体によるパーソナル・スペースの侵害に関する調査」という題目の質問紙は、片面印刷の A4 用紙 5 枚を綴じたものであった。質問紙の構成は、1 枚目が表紙、2 枚目が個人空間侵害場面の設定、低侵害条件と中侵害条件における被侵害度認知の測定、3 枚目が高侵害条件における被侵害度認知の測定と高侵害条件における対処行動の測定、4 枚目が高侵害条件における被侵害感情の測定、5 枚目が対人恐怖心性尺度であった。

全体教示　質問紙の表紙に“私たちは、自分の周りに、誰からも侵入されたくない自分だけの空間を持っています。この空間のことをパーソナル・スペース（個人空間）といいます。この調査は、あなたが「他人の所有する物体によって、自分のパーソナル・スペースを侵害されたと感じるかどうか」について、お尋ねするものです。・・・”という全体教示を記載した。このほかに表紙には、回答上の注意点として 2 点を挙げ、倫理的配慮として無記名式調査であること、個人情報の保護に配慮すること、回答は強制ではないことを明記し、対象者の年齢等を問う質問、調査者の氏名・連絡先も記載した。

個人空間の侵害場面の設定　授業前の休憩時間に 2 つ横並びの机の席に対象者が座り、その隣の席に知らない学生が座っていて、その知らない学生が iPad を実験参加者の机に 3 段階ではみ出すように置く場面を設定した。具体的な教示文は、“あなたは今、ある授業の開始前 10 分間の休憩時間に席に着いている状態です。そして、隣の机にはあなたが全く知らない学生が**以下の図**のように座っています。この状態をイメージしながら、以下の質問にお答えください。”であり、提示した図を図 1 に示した。なお、実験参加者が所属する大学では、学生は全員授業時に iPad を携行している。

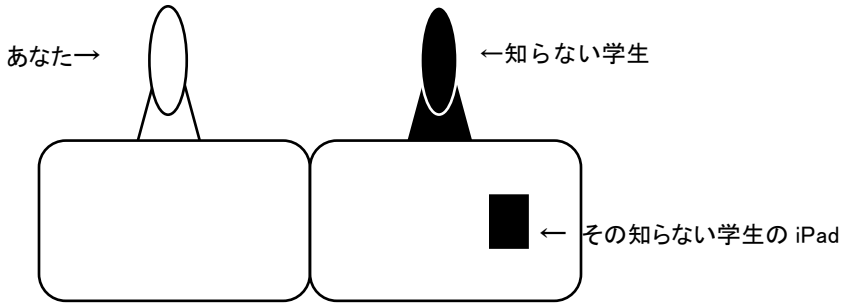

図 1　本研究で設定した個人空間の侵害場面

3 種類の個人空間の侵害条件の設定と被侵害度認知の測定

低侵害条件、中侵害条件、高侵害条件における被侵害度認知　図 2 に示した低侵害条件、図 3 に示した中侵害条件、図 4 に示した高侵害条件の場面設定をし、各条件における被侵害度認知を次のような 3 種類の教示文を提示するによって測定した。なお、／（スラッシュ）で表現した部分は、最初が低侵害条件、真中が中侵害条件、最後が高侵害条件における表現であり、実際には 3 つの独立した設問として提示した。“以下の図は、**上の図の机の部分**を上から見た様子です（この文は低侵害条件でのみ提示）。もし A／B／C のように知らない学生の iPad が、自分の机に**少し入り込んでいたら／かなり入り込んでいたら／完全に入り込んでいたら**、あなたはどの程度自分のパーソナル・スペースを侵害されたと感じますか。・・・”。各侵害条件で、どの程度侵害されたと感じるかについて、「全く感じない」（1 点）、「あまり感じない」（2 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「やや感じる」（4 点）、「かなり感じる」（5 点）の 5 段階で回答を求めた。

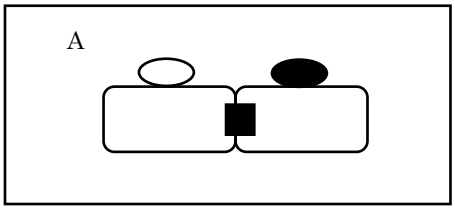

図 2　低侵害条件

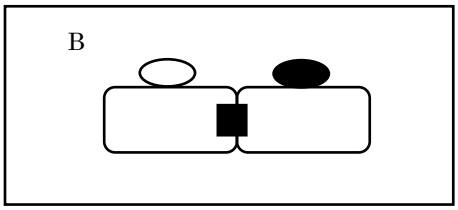

図 3　中侵害条件

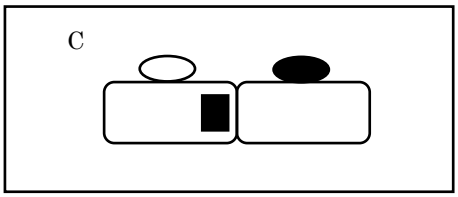

図 4　高侵害条件

高侵害条件における対処行動と被侵害感情の測定

高侵害条件における対処行動　表 1 に示した高侵害状況での対処行動行使の可能性について、以下の教示文によって測定した。“**上の設問の図 C の状況**を思い浮かべて、次の質問にお答えください。あなたは、以下の 8 つの行動をとる可能性がどのくらいありますか。・・・”。各行動をとる可能性について、「全く可能性がない」（1 点）、「あまり可能性がない」（2 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「やや可能性がある」（4 点）、「かなり可能性がある」（5 点）の 5 段階評定によって回答を求めた。

高侵害条件における被侵害感情　寺崎・岸本・古賀（1992）の多面的感情状態尺度を参考にして、14 項目から成る被侵害感情尺度を作成した。表 2 に示した高侵害状況における被侵害感情について、以下の教示文によって測定した。“**上の図 C の状況**を思い浮かべてお答えください。C のような状況で、あなたは以下のような感情がどのくらい生じると思いますか。・・・”。各感情をどのくらい感じるかについて、「全く感じない」（1 点）、「あまり感じない」（2 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「やや感じる」（4 点）、「かなり感じる」（5 点）の 5 段階評定によって回答を求めた。

対人恐怖心性尺度

堀井（2006）が作成した 5 因子（劣等恐怖、被害恐怖、自己視線・醜形恐怖、孤立・親密恐怖、加害恐怖）各 5 項目の合計 25 項目から成る対人恐怖心性尺度 II を使用した。ただし、実験参加者に不快感を与える恐れがあるため、第 3 因子の自己視線・醜形恐怖因子に属する 3 項目の表現を変更した。変更した項目の変更該当箇所は、醜形恐怖を表す「容姿がよくない」、「外見は変だ」という表現を「目つきがよくない」、「目つきは変だ」という表現に修正した。また、「目つきが悪い」という表現を「目つきが悪いのが気になる」と穏やかな表現に修正した。本研究で使用した対人恐怖心性尺度の一部修正版は、後出の表 8 に示した。

表 1　対処行動の項目

1	我慢する
2	iPad をどけてほしいと言葉がけをする
3	相手の方へ iPad を押しやる
4	席を移動する
5	出来るだけ相手と逆方向に座るイスをずらす
6	私のスペースに iPad を置くな、と抗議する
7	それとなく、相手に不愉快だとアピールする
8	相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く

表 2　被侵害感情の項目

1	圧迫感	8	不愉快
2	気づまり感	9	嫌な感じ
3	不安感	10	席を替わりたい気持ち
4	気になる感じ	11	この席にいたくない気持ち
5	ムカつく感じ	12	緊張感
6	気分を害する感じ	13	うろたえる感じ
7	怒り	14	気まずさ

結　　果

個人空間の侵害に対する反応の分析

3 種類の侵害条件における被侵害度認知　物体によって引き起こされる個人空間に対する 3 種類の異なる侵害度が生じさせる被侵害者の被侵害度認知を検討する。侵害条件別の被侵害度認知得点の平均値と標準偏差、および被侵害度認知得点に関する侵害条件間の差の分析を目的とする分散分析と多重比較の結果を表 3 に示した。

3 種類の侵害条件における被侵害度認知得点に関する対応のある 1 要因 3 水準の分散分析を行ったところ、条件間の差は有意であった。そこで、Holm 法による多重比較（有意水準を 5%に設定。以下同様）を行ったところ、3 条件間にすべてに有意差が見られ、被侵害度認知得点は、高侵害条件で最も高く、中侵害条件で次に高く、低侵害条件で最も低かった。

また、被侵害度認知得点に関して 3 種類の侵害条件間の相関関係を、ピアソンの積率相関係数 r を算出して検討したところ、すべての条件間に有意な正の相関（$ps < .01$）が認められた。すなわち、低侵害条件と中侵害条件の間には.77、中侵害条件と高侵害条件の間には.62、低侵害条件と高侵害条件の間には.49 の相関が得られた。

表 3　被侵害度認知得点の平均値と標準偏差、および分散分析と多重比較（$p < .05$）の結果

低侵害条件	中侵害条件	高侵害条件	分散分析	多重比較
3.24 (1.18)	4.06 (1.03)	4.63 (0.84)	F (2, 228) = 140.47, $p < .01$	高 ＞ 中 ＞ 低

注 1）左 3 列の数値は平均値（標準偏差）

高侵害条件における対処行動　個人空間の侵害が最も顕著である高侵害条件における被侵害者の対処行動の行使可能性を検討する。対処行動は最も重要な指標であるので、項目別の分析と因子別の分析を重ねて行う。8 項目の対処行動行使可能性得点の平均値と標準偏差、および対処行動の種類による得点の差の分析を目的とする分散分析と多重比較の結果を表 4 に示した。

表 4　高侵害条件における対処行動行使可能性得点の平均値と標準偏差、および分散分析と多重比較の結果

	対処行動	M	(SD)
1	我慢する	3.87	(1.22)
2	iPad をどけてほしいと言葉がけをする	2.56	(1.27)
3	相手の方へ iPad を押しやる	2.64	(1.40)
4	席を移動する	2.91	(1.36)
5	出来るだけ相手と逆方向に座るイスをずらす	3.00	(1.44)
6	私のスペースに iPad を置くな、と抗議する	1.63	(0.96)
7	それとなく、相手に不愉快だとアピールする	2.75	(1.33)
8	相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く	1.56	(1.06)
	分散分析	F (7, 798) = 46.84,	$p < .01$
	多重比較（$p < .05$）	1 > 5, 4, 7, 3, 2 > 6, 8	

対処行動行使可能性得点に関する対応のある 1 要因 8 水準の分散分析を行ったところ、対処行動の種類による差が有意であったため、多重比較を試みた。その結果、高侵害条件での対処行動使用可能性得点は、大きく 3 つの対処行動グループに分かれることが判明した。すなわち、行使可能性得点は、「1 我慢する」が最も高く、「6 私のスペースに iPad を置くな、と抗議する」と「8 相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く」が最も低く、そのほかの 5 種類の対処行動はその中間の値を示し、これら 3 グループ間にはそれぞれ有意差が認められた。

また、8 種類の対処行動行使可能性得点間の相関関係を検討した結果を表 5 に示した。表 5 から、8 種類の対処行動行使可能性得点間には、顕著な特徴が認められた。すなわち、「1 我慢する」とその他の 7 種類のうちの 4 種類の対処行動とのあいだに有意な負の相関関係が存在することが明らかとなり、「1 我慢する」という対処行動は、その他の 7 種類の対処行動とは異質な対処行動、逆の意

味をもつ対処行動であることが判明した。なお、そのほかの 7 種類の対処行動間の 21 個の相関係数のうち 16 個で有意な正の相関係数が得られ、有意な水準に達しなかった 5 個の相関係数の符号も正であることが分かり、7 種類の対処行動間には一貫して正の関係が存在することが示された。

表 5　高侵害条件における 8 種類の対処行動行使可能性得点間の相関関係

項目	1	2	3	4	5	6	7
2	-.51**						
3	-.15	.16					
4	.00	.08	.15				
5	.06	.01	.20*	.53**			
6	-.48**	.44**	.36**	.19*	.09		
7	-.39**	.43**	.34**	.25**	.29**	.42**	
8	-.25**	.18*	.34**	.19*	.26**	.41**	.31**

注 1）表内の数値は *r*

注 2）** $p < .01$、* $p < .05$

高侵害条件における対処行動行の因子構造　項目 1「我慢する」は、唯一他の項目と負の相関のあることが表 5 から示されたので、以下の分析では、項目 1 については項目得点を逆転化して使用する。したがって、これ以降、項目 1 の得点が高いことは、「我慢しない」ことを意味することになる。

8 項目の対処行動の因子構造を解明するために、行使可能性得点に関する最尤法による探索的因子分析を行い、初期解の固有値とその推移から 2 因子解（累積寄与率 56.01%）が適当と判断した。そこで、2 因子解を指定し、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その際、因子負荷量の絶対値が.40 以上で、他の因子の負荷量の絶対値との差が.20 以上の項目を残し、この基準を満たさない項目を削除した。その結果、項目 3「相手の方へ iPad を押しやる」と項目 8「相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く」の 2 項目を削除し、最終的に表 6 に示した結果を得た。

表 6 の因子別の項目内容から、4 項目から成る第 1 因子は「言語的対処行動」因子、2 項目から成る第 2 因子は「回避逃避行動」因子と命名した。その結果、2 因子 6 項目の対処行動行使可能性尺度を作成することができた。因子間相関は.20 であり、低い相関であった。第 1 因子の 4 項目間のα係数は.75、第 2 因子の 2 項目間のα係数は.70 であった。

第 1 因子「言語的対処行動」因子の平均値（標準偏差）は 2.26（0.91）、第 2 因子「回避逃避行動」因子の平均値（標準偏差）は 2.96（1.23）であった。因子得点間の差を検討するために、対応のある 1 要因 2 水準の分散分析を行ったところ、回避逃避行動因子得点の方が言語的対処行動因子得点よりも有意に高かった（$F(1, 114) = 28.28$, $p < .01$）。

なお、6 項目の尺度全体の平均値（標準偏差）は 2.49（0.79）、α係数は.68 であった。

表 6　高侵害条件における対処行動行使可能性得点に関する因子分析結果

	項目	第 1 因子	第 2 因子	h^2
第 1 因子：言語的対処行動				
1	我慢しない*	**.75**	-.16	.53
6	私のスペースに iPad を置くな、と抗議する	**.70**	-.06	.48
2	iPad をどけてほしいと言葉がけをする	**.66**	.05	.45
7	それとなく、相手に不愉快だとアピールする	**.56**	.28	.46
第 2 因子：回避逃避行動				
5	出来るだけ相手と逆方向に座るイスをずらす	-.07	**.84**	.68
4	席を移動する	.03	**.65**	.43

注 1）*項目得点を逆転化している

高侵害条件における被侵害感情とその構造　高侵害条件で被侵害者が感じる被侵害感情の強さを検討するために、14 項目の被侵害感情得点の平均値と標準偏差を表 7 に示した。被侵害感情得点 14 項目間の相関関係を、ピアソンの積率相関係数 r を算出して検討したところ、91 個の相関係数は全て正であること、また、83 個の相関係数が 5%水準で有意であることを確認した。表 7 から、14 項目の被侵害感情のうち、「気になる感じ」が最も強く喚起され、「嫌な感じ」、「不愉快」、「気づまり感」が次に強く喚起されることが分かった。

14 項目の被侵害感情の因子構造を解明するために、被侵害感情得点に関する最尤法による探索的因子分析を行い、初期解の固有値とその推移から 2 因子解（累積寄与率 62.16%）が適当と判断した。そこで、2 因子解を指定し、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行い、その結果を併せて表 7 に示した。因子負荷量の絶対値が.40 以上で、他の因子の負荷量の絶対値との差が.20 以上という項目採択基準を全項目が満たした。

表 7 の因子別の項目内容から、8 項目から成る第 1 因子は「能動的否定感情」因子、6 項目から成る第 2 因子は「受動的否定感情」因子と命名した。その結果、2 因子 14 項目の被侵害感情尺度を作成することができた。因子間相関は.51 であり、中程度の相関であった。第 1 因子の 8 項目間のクロンバックのα係数は.93、第 2 因子の 6 項目間のα係数は.83 であった。

第 1 因子「能動的否定感情」因子の平均値（標準偏差）は 3.44（1.03）、第 2 因子「受動的否定感情」因子の平均値（標準偏差）は 3.10（0.93）であった。因子得点間の差を検討するために、対応のある 1 要因 2 水準の分散分析を行ったところ、能動的否定感情因子得点の方が受動的否定感情因子得点よりも有意に高かった（F (1, 114) = 13.25, p < .01）。

なお、14 項目の尺度全体の平均値（標準偏差）は 3.29（0.85）、α係数は.91 であった。

表 7　高侵害条件における被侵害感情得点の平均値と標準偏差、および因子分析結果

	項目	*M*	(*SD*)	第 1 因子	第 2 因子	h^2
第 1 因子：能動的否定感情						
5	ムカつく感じ	3.24	(1.33)	**.94**	-.15	.76
8	不愉快	3.62	(1.30)	**.92**	-.04	.81
9	嫌な感じ	3.64	(1.25)	**.89**	.02	.80
6	気分を害する感じ	3.35	(1.29)	**.88**	-.08	.71
7	怒り	2.68	(1.23)	**.71**	.03	.52
11	この席にいたくない気持ち	3.24	(1.37)	**.70**	.16	.63
10	席を替わりたい気持ち	3.41	(1.35)	**.70**	.04	.51
4	気になる感じ	4.32	(0.93)	**.42**	.18	.28
第 2 因子：受動的否定感情						
12	緊張感	2.67	(1.40)	-.19	**.70**	.40
13	うろたえる感じ	2.57	(1.32)	-.03	**.69**	.45
2	気づまり感	3.60	(1.16)	.17	**.67**	.59
14	気まずさ	3.58	(1.16)	-.00	**.67**	.44
1	圧迫感	3.57	(1.17)	.15	**.65**	.54
3	不安感	2.59	(1.28)	.04	**.61**	.40

対人恐怖心性尺度の因子構造の確認

堀井（2006）の 5 因子 25 項目の対人恐怖心性尺度Ⅱの一部修正版の因子構造を確認するため、25 項目の対人恐怖心性得点に関して、5 因子指定の最尤法による確認的因子分析を行い、その結果を表 8 に示した。表 8 からわかるように、本研究で使用した対人恐怖心性尺度は、元尺度である堀井（2006）と同一の各 5 項目から構成される 5 因子にまとまることが確認された。適合度指標は、CFI = .851、RMSEA = .091、SRMR = .078、GFI = .734、AGFI =.674 であり、決して十分な値であるとは言えないまでも、ぎりぎり許容できる範囲の値を示した。また、各因子を構成する項目の内的整合性をクロンバックのα係数を算出して検討すると、第 1 因子が.81、第 2 因子が.83、第 3 因子が.90、第 4 因子が.87、第 5 因子が.84 と十分に高い数値が得られた。適合度指標の値とα係数の値から総合的に判断し、各 5 項目から成る 5 因子 25 項目の対人恐怖心性尺度の妥当性が確認できたと解釈される。

ただし、元尺度の第 3 因子「自己視線・醜形恐怖因子」に属する 3 項目の内容を修正したので、第 3 因子は自己視線恐怖因子と命名した。したがって、本研究では、対人恐怖心性尺度の因子名は、第 1 因子「劣等恐怖因子」、第 2 因子「被害恐怖因子」、第 3 因子「自己視線恐怖因子」、第 4 因子「孤立・親密恐怖因子」、第 5 因子「加害恐怖因子」となる。各因子の平均値（標準偏差）は、因子順に①3.35（0.91）、②2.63（0.90）、③2.29（1.01）、④2.45（0.94）、⑤2.67（0.99）であった。

なお、25 項目の尺度全体の平均値（標準偏差）は、2.68（0.75）であり、α係数は.94 であった。

表 8　対人恐怖心性尺度に関する確認的因子分析の結果

	項目	1	2	3	4	5	h^2
1	周りに自分より実力のある人がいて不安である	.45					.20
6	他人が自分より優れていると不安になる	.54					.29
11	自分の考えが周りと同じかどうか気になる	.66					.44
16	人から批判されることをひどく気にしている	.84					.71
21	周りができることを自分一人だけできなくて不安に思うことがある	.83					.69
2	周囲に感情むきだしの人がいて怖い		.61				.37
7	知り合いに怒りっぽい人がいて怖い		.59				.35
12	周りには何を考えているか分からない人がいて怖い		.66				.43
17	周りに自分の気持ちを傷つける人がいて怖い		.76				.58
22	自分の事を決めつける人がいて怖い		.82				.68
3	自分の目つきが悪いことが気になる*			.70			.49
8	自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思う			.79			.63
13	人と会っていると目つきが悪くなる			.79			.63
18	自分の目つきがよくないために周囲の人に嫌な思いをさせている*			.89			.79
23	自分の目つきは変だと思う*			.87			.76
4	裏切られると思って人と深くかかわらないようにしている				.69		.47
9	人と親密な関係になることは怖い				.82		.67
14	周りに頼れる人はほとんどいない				.74		.55
19	自分は周囲に理解されない人間である				.83		.68
24	誰も自分のことを心配してくれないと思う				.71		.51
5	人を精神的に追い詰めてしまうことがある					.59	.35
10	思ったことをすぐに相手に言ってしまい相手を傷つけてしまう					.59	.34
15	いつか人を傷つけてしまうのではないかと思う					.74	.55
20	自分は他人に残酷な人間である					.79	.62
25	自分の本音を話すと相手を傷つけてしまう気がする					.82	.68
因子間相関	第 2 因子	.65					
	第 3 因子	.36	.58				
	第 4 因子	.66	.77	.56			
	第 5 因子	.63	.74	.70	.80		

注 1）表内の第 1 列目の項目番号は質問紙での配列順序を示す

注 2）表内の第 1 行目の 1～5 は第 1 因子～第 5 因子を表す

注 3）＊ 元尺度の表現を修正した項目

個人空間の侵害に対する反応と対人恐怖心性の関係

個人空間の侵害に対する反応の条件別・因子別および全体の得点と対人恐怖心性尺度得点との相関分析　個人空間の 3 種類の侵害条件および 3 条件全体の侵害度認知得点（4 変数）、個人空間の侵害に対する 2 因子および全体の対処行動行使可能性得点（3 変数）、個人空間の侵害に対する 2 因子および全体の被侵害感情得点（3 変数）のそれぞれと、25 項目全体の対人恐怖心性尺度得点との相関関係を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した結果を表 9 に示した。個人空間の侵害に対する反応の中の 6 つの変数が対人恐怖心性尺度得点と有意な正の相関関係を示した。それらの変数は、低侵害条件での被侵害度認知得点、侵害条件全体での被侵害度認知得点、回避逃避行動行使可能性得点、能動的否定感情得点、受動的否定感情得点、被侵害感情尺度得点であった。

これらの結果から、対人恐怖心性は、個人空間の侵害の程度が低い場合と侵害条件全体の場合に被侵害度認知を促進すること、対処行動のうちの回避逃避行動のみを促進すること、被侵害感情については能動的否定感情、受動的否定感情、被侵害感情全体を促進することが示された。このように、対人恐怖心性は、被侵害感情全般を高めるが、被侵害度認知に関しては低侵害条件で過敏な反応を増加させること、対処行動では侵害者と直接接触しない回避逃避行動のみを増加させることが判明した。

表 9　個人空間の侵害に対する反応の条件別・因子別および全体の得点と、対人恐怖心性尺度得点との相関関係

個人空間の侵害に対する反応	相関係数	
被侵害度認知		
低侵害条件	.31	**
中侵害条件	17	
高侵害条件	.04	
侵害条件全体	.22	*
対処行動行使可能性		
言語的対処行動	-.15	
回避逃避行動	.19	*
対処行動全体	-.02	
被侵害感情		
能動的否定感情	.21	*
受動的否定感情	.49	**
被侵害感情全体	37	**

対人恐怖心性尺度の因子得点を説明変数、個人空間の侵害に対する反応の条件別・因子別および全体の得点を目的変数とする重回帰分析　対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数とし、個人空間の侵害に対する反応の条件別・因子別および全体の得点を目的変数とする重回帰分析を行っ

た。

初めに、対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数とし、3 種類の侵害条件別および 3 条件全体の被侵害度認知得点の 4 変数を目的変数とする重回帰分析の結果を表 10 に示した。決定係数から、対人恐怖心性は、低侵害条件、中侵害条件、全侵害条件における被侵害度認知に対して有意な説明力をもつが、高侵害条件における被侵害度認知に対しては有意な説明力をもたないことが分かった。そして表 10 から、低侵害条件、中侵害条件、全侵害条件での被侵害度認知に対して劣等恐怖が有意な正の影響及ぼすことが示された。しかし、このほかには、低侵害条件と全侵害条件での被侵害度認知に対して被害恐怖が正の影響を及ぼす傾向と、高侵害条件での被侵害度認知に対して孤立・親密恐怖が負の影響を及ぼす傾向が示されるにとどまった。

表 10　対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数、4 種類の被侵害度認知得点を目的変数とする重回帰分析の結果

説明変数	目的変数（被侵害度認知）			
（対人恐怖心性）	低侵害条件	中侵害条件	高侵害条件	全侵害条件
劣等恐怖	.23 *	.32 **	.19	.29 *
被害恐怖	.24 +	.13	.19	.21 +
自己視線恐怖	-.04	-.04	-.07	-.05
孤立・親密恐怖	-.04	-.14	-.26 +	-.15
加害恐怖	.03	-.02	.03	.01
決定係数（R^2）	.15 **	.11 *	.07	.12 *

注 1）表内の数値は標準化係数 β

注 2）** $p < .01$、* $p < .05$、+ $p < .10$

次に、対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数とし、2 種類の因子別および尺度全体（6 項目）の対処行動行使可能性得点の 3 変数を目的変数とする重回帰分析の結果を表 11 に示した。決定係数から、対人恐怖心性は、言語的対処行動の行使可能性に対しては有意な説明力をもつが、回避逃避行動および対処行動全体の行使可能性に対しては有意な説明力をもたないことが分かった。そして表 11 から、言語的対処行動と対処行動全体の行使可能性に対して孤立・親密恐怖が有意な負の影響及ぼすことが示された。しかし、このほかには、言語的対処行動行使可能性に対して劣等恐怖が負の影響を及ぼす傾向と、回避逃避行動行使可能性に対して被害恐怖が正の影響を及ぼす傾向が示されるにとどまった。

最後に、対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数とし、2 種類の因子別および尺度全体（14 項目）の被侵害感情得点の 3 変数を目的変数とする重回帰分析の結果を表 12 に示した。決定係数から、対人恐怖心性は能動的否定感情、受動的否定感情、被侵害感情全体のいずれに対しても有意な説明力をもつことが分かった。そして表 12 から、被侵害感情全体に対して劣等恐怖が有意な正の影響及ぼすこと、能動的否定感情、受動的否定感情、被侵害感情全体に対して被害恐怖が有意な正の

影響を及ぼすこと、能動的否定感情と被侵害感情全体に対して孤立・親密恐怖が有意な負の影響を及ぼすことが示された。このほかには、能動的否定感情と受動的否定感情に対して劣等恐怖が正の影響を及ぼす傾向が示された。

表 11　対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数、3 種類の対処行動行使可能性得点を目的変数とする重回帰分析の結果

説明変数（対人恐怖心性）	目的変数（対処行動）言語的対処行動	回避逃避行動	対処行動全体
劣等恐怖	-.21 +	.11	-.11
被害恐怖	.09	.25 +	.20
自己視線恐怖	.19	-.00	.14
孤立・親密恐怖	-.30 *	-.13	-.29 *
加害恐怖	.05	.02	.05
決定係数（R^2）	.12*	.07	.07

注 1）表内の数値は標準化係数 β

注 2）* $p < .05$、+ $p < .10$

表 12　対人恐怖心性尺度の 5 つの因子得点を説明変数、3 種類の被侵害感情得点を目的変数とする重回帰分析の結果

説明変数（対人恐怖心性）	目的変数（被侵害感情）能動的否定感情	受動的否定感情	被侵害感情全体
劣等恐怖	.20 +	.18 +	.22 *
被害恐怖	.36 **	.33 **	.40 **
自己視線恐怖	.06	.11	.09
孤立・親密恐怖	-.27 *	-.01	-.19 *
加害恐怖	-.04	.02	-.02
決定係数（R^2）	.14 **	.27 **	.23 **

注 1）表内の数値は標準化係数 β

注 2）** $p < .01$、* $p < .05$、+ $p < .10$

考　　察

明確な個人空間の侵害事態での被侵害者の反応の特徴

設定した高侵害条件の妥当性　本研究では、他者の所有物による個人空間の侵害が明白な事態を、場面想定法を利用して設定し、その明白な侵害事態における被侵害者の感情的反応と行動的反応を

測定し、そうした反応の特徴を解明しようとした。そのために、個人空間の侵害事態を 3 段階で設定した。すなわち、着席している被侵害者の机（個人空間に対応すると仮定）に対して、侵害者が所有する物体が少しはみ出す低侵害条件、かなりはみ出す中侵害条件、完全に入り込む高侵害条件を設定した。被侵害者の被侵害度認知を検討した結果、侵害されたという被侵害者の認知は、低侵害条件では明瞭ではなかったが（1〜5 点の 5 段階評定で M = 3.24）、中侵害条件ではやや侵害されたと認知し（M = 4.06）、高侵害条件ではその侵害されたという認知はさらに強くなっていた（M = 4.63）。このように、個人空間の侵害に対する被侵害者の感情的反応や行動的反応を測定するために設定した高侵害条件では、かなり強く侵害されたという認知が生じていることが確認され、個人空間の侵害事態での感情的反応と行動的反応を測定するための侵害条件としてこの高侵害条件の妥当性が証明された。

個人空間の侵害に対する感情的反応と行動的反応　高侵害条件における被侵害者の被侵害感情を測定するために用意した 14 項目の被侵害感情の仮尺度は、因子分析の結果、「能動的否定感情」因子（8 項目）と「受動的否定感情」因子（6 項目）の 2 因子構造であると判明し、2 因子 14 項目の被侵害感情尺度を作成することができた。そして、個人空間の侵害は、5 段階評定（1〜5 点）で項目平均 3.29 点の被侵害感情を生じさせることが分かった。また、個人空間の侵害は、受動的否定感情（M = 3.10）よりも能動的否定感情（M = 3.44）の方をより強く生じさせることも分かった。

同じく、高侵害条件における被侵害者の行動的反応を測定するために用意した 8 項目の対処行動の仮尺度についての結果から、個人空間の侵害に対する対処行動としては、「我慢する」（M = 3.87）が最も高く、「私のスペースに iPad を置くな、と抗議する」（M = 1.63）と「相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く」（M =1.56）が最も低く、他の 5 項目の対処行動はその中間（M = 2.56〜3.00）であることが明らかとなった。ところで、相関分析の結果から、「我慢する」という対処行動は、8 項目の対処行動の仮尺度の中でも他の項目との間に負の相関関係が存在する異質の項目であることが示されたので、得点を逆転することによって「我慢しない」という対処行動として以降の分析では扱うことにした。

8 項目の対処行動の仮尺度の因子分析の結果、「言語的対処行動」因子（4 項目）と「回避逃避行動」因子（2 項目）の 2 因子構造であると判明し、2 因子 6 項目の対処行動尺度を作成することができた。そして、個人空間の侵害は、5 段階評定（1〜5 点）で項目平均 2.49 点の対処行動を生じさせるので、個々の対処行動が生じる度合いは決して高くないことが分かった。また、個人空間の侵害は、言語的対処行動（M = 2.26）よりも回避逃避行動（M = 2.96）の方を相対的により強く生じさせるので、個人空間の侵害に対しては主に回避逃避行動によって対処することが分かり、仮定された対処行動が生じていることが証明された。

なお、因子としてまとまらず削除された対処行動の項目は「相手の方へ iPad を押しやる」と「相手の iPad の上に、わざと自分の物を置く」の 2 項目であり、これらの対処行動はいわゆる攻撃行動に該当する対処行動であり、個人空間の防御と確保に使用される種類の対処行動ではなかった。そうした意味で、個人空間の侵害に対する対処行動から削除されたのは当然であると解釈される。

個人空間の侵害に及ぼす対人恐怖心性の影響

対人恐怖心性尺度との相関と対人恐怖心性尺度の因子構造　個人空間の侵害に対する諸反応と対人恐怖心性尺度得点との相関分析の結果から、対人恐怖心性が高くなると、①低侵害条件と全侵害条件における被侵害度認知が高まること、②能動的否定感情、受動的否定感情、被侵害感情全体が高まること、③回避逃避行動をとる可能性が高まることが示された。しかし、対人恐怖心性は、中侵害条件と高侵害条件における被侵害度認知とは無関係であり、また、言語的対処行動や対処行動全体とも無関係であった。

本研究では、堀井（2006）の対人恐怖心性尺度Ⅱの項目の一部を修正して使用したが、確認的因子分析の結果、堀井（2006）の尺度と同一の項目構成から成る 5 因子構造（劣等恐怖、被害恐怖、自己視線恐怖、孤立・親密恐怖、加害恐怖）を確認することができた。ただし、項目の一部修正を受けて、第 3 因子の名称を「自己視線・醜形恐怖」因子から「自己視線恐怖」因子へと修正した。

対人恐怖心性を説明変数、個人空間の侵害への反応を目的変数とする重回帰分析の結果　対人恐怖心性の 5 つの因子得点を説明変数、個人空間の侵害に対する諸反応の条件別・因子別得点と全体得点のそれぞれを目的変数とする重回帰分析の結果から以下のような結果が得られた。

被侵害度認知に及ぼす対人恐怖心性の影響に関しては、劣等恐怖が強くなると、低侵害条件と中侵害条件と全侵害条件における被侵害度認知が高まること、すなわち、個人空間が比較的小さく侵害された場合には、劣等恐怖心性が高いほど、被侵害者はより大きく侵害されたと認知することが実証された。しかし、高侵害条件での侵害度認知に対しては、劣等恐怖心性の高さは影響しておらず、個人空間が大きく侵害された場合には、対人恐怖心性の高低に関わらず、個人空間を同じように大きく侵害されたと認知するのではないかと解釈できる。

被侵害感情に及ぼす対人恐怖心性の影響に関しては、被害恐怖心性が高くなると、能動的否定感情と受動的否定感情が高まることが示された。周囲の他者から被害を受けることを恐れる被侵害者は、自分の個人空間を侵害されることに対してより敏感であるため、能動的および受動的な否定感情をより強く喚起されると解釈される。これに対して、孤立・親密恐怖心性が高くなると、能動的否定感情が低くなることが示された。すなわち、他者から孤立することや他者と親密になることを恐れる被侵害者は、自分の個人空間を侵害されても、比較的強い否定感情である能動的否定感情の喚起が抑制されてしまうのかもしれない。このように、対人恐怖心性を構成する因子の違いは、被侵害感情に逆方向の影響をもたらすことが明らかとなった。

対処行動に及ぼす対人恐怖心性の影響に関しては、孤立・親密恐怖心性が強くなると、言語的対処行動をとる可能性が低くなることが示された。すなわち、他者から孤立することや他者と親密になることを恐れる被侵害者は、他者から孤立することを恐れ、また、他者と親密になる機会を作ることを恐れ、自分の個人空間を侵害してくる侵害者に対して言語的対処行動をとることが困難になってしまうのかもしれない。

今後の課題

本研究では、侵害度の異なる 3 種類の侵害条件を設定し、そのうちの高侵害条件での個人空間の

侵害に対する感情的反応と対処反応を検討した。高侵害条件だけでなく、低侵害条件および中侵害条件での個人空間の侵害に対する感情的反応と対処反応を測定し、比較検討する必要がある。

また、本研究では、座席場面を使用して、物体による個人空間の侵害に対する反応を検討したが、多様な場面での物体による個人空間に侵害に対する反応を取り上げ、研究結果の一般化を促進しなければならない。

さらに、対処行動尺度の第 2 因子の項目数が 2 項目と少なかったので、対処行動に関する更なる項目収集を行い、妥当性の高い対処行動尺度に改良していくことが望ましい。

最後に、矢澤（2003）では、1 種類に限定された対処行動であったが、実際の対処行動を実験室実験によって測定していた。本研究では、複数の対処行動を採用したものの、投影法的な手法を用いた質問紙実験によって対処行動の実行可能性を測定した。こうした研究形態の違いによって異なる結果が生じうることを留意し、実験室実験を実施することによって本研究で得られた結果を確認する必要がある。

引用文献

穐山 貞登 (2002). 個人空間 古畑 和孝・岡 隆(編) 社会心理学小辞典〔増補版〕 有斐閣 p. 74

青木 祐樹・城 仁士 (2010). 他者の視線と性格特性が心理的領域に与える影響 人間・環境学会誌, **13(1)**, 1-8.

青野 篤子 (1979). 対人距離に関する発達的研究 実験社会心理学研究, **19**, 97-105.

青野 篤子 (1981). 個人空間に及ぼす性と支配性の影響 心理学研究, **52**, 124-127.

青野 篤子 (2003a). 対人距離の性差に関する研究の展望―従属仮説の観点から― 実験社会心理学研究, **42**, 201-218.

青野 篤子 (2003b). 対人距離に及ぼす性と地位の影響 : 従属仮説の観点から 社会心理学研究, **19**, 51-58.

青野 篤子 (2009). パーソナル・スペース 日本社会心理学会(編) 社会心理学事典 丸善 pp. 264-265.

有賀 敦紀 (2016). 拡張的パーソナルスペース――所持品間の距離に反映される所有者の対人距離―― 心理学研究, **87**, 186-190.

藤原 武弘 (1986). パーソナル・スペースに表れた心理的距離についての研究 広島大学総合科学部紀要 Ⅲ, **10**, 83-92.

福田 雄一・坂本 花奈 (2015). パーソナルスペースとシャイネスの関連 広島文教女子大学心理学研究, **1(2)**, 67-74.

伏田 幸平・長野 祐一郎 (2014). パーソナル・スペース侵害時における視線の有無が生理・心理的反応に与える影響 文京学院大学人間学部研究紀要, **15**, 83-93.

Hall, E. T. (1959). The silent language. New York: Doubleday & Company, Inc.（エドワード・T・ホール (著) 國弘 正雄・長井 善見・斎藤 美津子 (訳) (1966). 沈黙のことば――文化・行動・思考 南

雲堂）

Hall, E. T. (1966). The hidden dimension. New York: Doubleday & Company, Inc.（エドワード・T・ホール (著)　日高 敏隆・佐藤 信行 (訳) (1970).　かくれた次元　みすず書房）

堀井 俊章 (2006).　対人恐怖心性尺度Ⅱの開発――対人関係におけるおびえの心性を測定する試み――　学生相談研究, **26**, 221-232.

堀井 俊章・小川 捷之 (1996).　対人恐怖心性尺度の作成　上智大学心理学年報, **20**, 55-65.

堀井 俊章・小川 捷之 (1997).　対人恐怖心性尺度の作成（続報）　上智大学心理学年報, **21**, 43-51.

石井 眞治 (1995).　個人空間　小川 一夫 (監修)　改訂新版社会心理学用語辞典　北大路書房　pp. 91-92.

狩野 素朗 (1993).　「近づく場合」と「近づかれる場合」および親密性が個人空間に及ぼす効果　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, **38(1)**, 1-10.

北川 歳昭 (1998).　教室の座席行動と個人空間―教師への距離の調整としての学生の着席位置―　実験社会心理学研究, **38**, 125-135.

熊谷 信順 (1987).　座席選択行動からみた個人空間　山口大学教育学部研究論叢 第 3 部, **37**, 1-11.

熊谷 信順 (1992).　個人空間侵入によって引き起こされる退避行動からみた個人空間の構造　山口大学教育学部研究論叢 第 3 部, **42**, 1-14.

三井 宏隆 (1981).　Overt behavior としての Personal Space 研究の展望　実験社会心理学研究, **21**, 65-76.

中野 靖彦・岩本 久実 (1993).　パーソナル・スペースの発達に関する研究―生徒の教師に対する心理的距離―　愛知教育大学教科教育センター研究報告, **17**, 113-118.

野瀬 出・雨森 雅哉・中尾 彩子・松尾 千尋・山岡 淳 (2005).　パーソナルスペースへの侵入に対する心理・生理的反応―接近者の印象による影響―　文京学院大学研究紀要, **7(1)**, 263-273.

大里 栄子 (2005).　対人コミュニケーションと個人空間　福岡国際大学紀要, **13**, 21-27.

渋谷 昌三 (1985).　パーソナル・スペースの形態に関する一考察　山梨医科大学紀要, **2**, 41-49.

渋谷 昌三 (1987).　対人距離の発達的変化に関する投影法的研究　山梨医科大学紀要, **4** , 52-61.

渋谷 昌三 (1988).　Personal space 研究の背景　山梨医科大学紀要, **5**, 48-54.

Sommer, R. (1959). Studies in personal space. *Sociometry*, **22**, 247-260.

杉本 浩利 (2000).　対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす影響についての研究―個人空間の投影法的測定を通して―　九州大学心理学研究, **1**, 67-78.

田中 政子 (1973).　Personal Space の異方的構造について　教育心理学研究, **21**, 223-232.

VandenBos, G. R. (Ed. in chief) (2007). personal space　*APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association. p. 690.（ファンデンボス, G. R. (編)　繁桝 算男・四本 裕子 (監訳) (2013).　個人空間　APA 心理学大辞典　培風館　p. 289.）

寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992).　多面的感情状態尺度の作成　心理学研究, **62**, 350-356.

八重澤 敏男・吉田 富二雄 (1981).　他者接近に対する生理・認知反応――生理指標・心理評定の多次元解析――　心理学研究, **52**, 166-172.

山口 千晶・山 祐嗣 (2016). 現実世界状況法によるパーソナル・スペースの測定 対人社会心理学研究, **16**, 1-8.

矢澤 久史 (2003). 物体によるパーソナル・スペースの侵害 東海女子大学紀要, **23**, 175-180.

Personal-space invasion by other person's belongings: Relationships between psychological and behavioral responses and anthropophobic tendency among invadees

Hiromi FUKADA (Hiroshima Bunkyo Women's University)
and
Risa OSAKA (Hiroshima Bunkyo Women's University)

In the situation where the individual's personal space was invaded by other person's belongings, the present study was conducted to clarify the characteristics of affections and coping behaviors as psychological and behavioral responses, as well as the relationships between each of affections and coping behaviors and anthropophobic tendency among invadees. One hundred and fifteen female college students participated in the questionnaire experiment using projective technique. It was found that the greater the personal-space invasion was, the greater the invadees' perceived invasion. Under the high invasion condition where invadees' perceived invasion was the greatest, invadees' affections have two-factor structure (active negative affections and passive negative affections), and invadees were aroused more active negative affections than passive negative affections. Under the high invasion condition, invadees' coping behaviors have two-factor structure (verbal coping behaviors and avoidance-escape behaviors), and invadees were more likely to exhibit avoidance-escape behaviors than verbal coping behaviors. It was confirmed that anthropophobic tendency among invadees consisted of five factors. There existed positive relationship between "fear of being hurt by others" and active or passive negative affections, and negative relationship between "fear of isolation and emotional touching" and active negative affections or verbal coping behaviors.

Key words: personal space, personal-space invasion by other person's belongings, affections, coping behaviors, anthropophobic tendency.